小説の極意

ぼーず平野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小説の極意

【Ｎコード】
Ｎ０３１１Ｑ

【作者名】
ぼーず平野

【あらすじ】
小説家志望の何樫くんの言う、小説の極意とはなにか。

何樫君が来た。
何樫君は近ごろ小説家を志しているようである。勤め人をしながら、毎日深夜二時くらいまで書き続けているらしい。激しいときには夜が白むころまで書きつづけ、そうして二時間ほど仮眠してから仕事に出ると云う。
「書きたいことが山ほどあって、書いても書いても減りません」
「いったい一日にどれくらい書くのかね」
「平均すると三十枚ですかなァ。多い日で四五十枚は軽いです」と、何樫君は昂然と云い放っておいて、巻莨をふかして紫煙の行方を眺めている。
「よくそれだけ進むね」
すると何樫君は笑って、
「そこいらの気取った連中と一緒にされては困ります」と云う。
「気取った連中？」
「純文学と称する分野には、ずいぶん気取った連中がいます」
「私には判らんな」
「そうでしょう。純粋だの芸術だの云っても、所詮は商業です」
「判らんと云ったのは、知らないという意味だ」
「先生は文学が嫌いですか」
「好きも嫌いもないね」
私は昨夜、ちょっとした宴があって少し飲みすぎたので、ぼんやりしている。頭のまわりにモヤがかかったようになって、そこだけまるで他人のようである。しかしそれよりも、大変腹が減っているから、さっきから蕎麦でも食いたいと思いつめている。
「つまり、個々の作品が面白いかどうかということだ」
私は言葉を継いだ。
「そうですか。何をもって面白いと仰るのでしょう」

こちらの胃袋の現況を知らない何樫君は、平気で攻めてくる。
「理屈ではないね」
「僕の研究では、不思議なことに、面白いと思う小説には必ず一定の法則があります。まあ極意と呼んで差し支えないでしょうな」
「どんな」
「どんなでも、それはお尋ねにならずとも良いでしょう」
そう云っておいて何樫君は恬然としている。しかしそれではさすがに矛盾すると思ったのか、
「たとえばですよ」と、茶請けに出した羊羹を楊枝で刺す。
「たとえば、筆者は徹頭徹尾冷静でなければいかんということです」
「どういうことだね」
「仮にこの羊羹が金の延べ棒だとします」と何樫君は突刺した羊羹を見つめる。
「少し無理な仮だが、まあ延べ棒としよう」
「先生はこの延べ棒にかねてから目をつけていますな。しかもかなり執着をもっている」と、何樫君は人をつかまえて業突く張りのように云う。
「なにしろこの延べ棒は、相当な価値をもっていますからな」
「どれくらいな価値だ」
「その、なんですな。とにかく私が破産しかけるほど価値があるのです。三十万円はしましょう」
「そんなにするのかい」
「ええ、しますとも。先生の安月給ではちょっと手が出ますまい」
安月給は余計だが、手が出ないことには違いない。
「その延べ棒をですな、こう……」
云いながら何樫君は、三十万円をひょいと口に放りこんで食ってしまった。
「あ」と、私は思わず声をだした。
何樫君は黙って口をもぐもぐさせる。そうして苦しいのか、ちょいと茶を飲んだ。この茶は年末に家内の実家から送ってきたものだ。

旨くないので家内にそう云ったら、では来客用にしましょうと答えた。だから何樫君が飲んでいる。
「先生、その『あ』ですよ」と何樫君は胸を叩きながら云う。そうして懐から白いハンカチをだして口を拭う。
「その『あ』は、人物の心の動きですな。ですが、筆者が一緒になって動いていたんではしょうがない」
「動かないでどうするんだ」
「なにもしません」
「それで意図が伝わるのかい」
「そこが小説家の腕の見せどころです」と云いながら、何樫君は延べ棒をもうひとつつまむ。
「君はどうなんだ」
「目下修行中です」
「なるほど」
「ときに先生、実のところ僕は、書いたものを一度先生に読んでいただきたいと思っているのです」
私はとっさに何樫君のまだ読まぬ小説を想像して、さっきからの空腹とあわせて胃が痛くなった。
「膨大なのは困る」
「いえ、僅々千二百枚です」
「なかなか時間がないね」
「先生、時間はあるなしではなく、相手のためにつくるものです」
「そうさ。君そんなことより蕎麦でも取ろうか」
「ええ、まあよしておきましょう」
私が冷淡なものだから、些か気落ちしたようでもある。
「ではうどんにするか」
「このところ胸焼けがおきますんで」
たった今、延べ棒を立てつづけに二切れ食ったことは忘れているようだ。
「小説を読むのはいいが、私に感想を求めても駄目だよ」

「ええ、それは判ってます。先生は文学に縁のない方面ですから」
と何樫君は、遠慮のないところを口にする。
「ではなぜ私に読ませるのかね」
「先生ですから」
「先生なら読ませるのかい」
「そうではありませんが、お嫌ならいいです」とまた凹む。
「嫌とは云ってない。云ってないが、文学に縁のない人間に読ませようと云うんだから、何か了見あってのことだろう」
「了見なんぞないのです」
「嘘を云いたまえ」
「嘘じゃありません」
「では読まなくてもいいだろう」
「どうしてです」
「感想を云わなくていいなら、読まなくても同じことだ」
「それは違います。読んで私のことを、ああこういう男かと理解して頂ければそれで嬉しいのです」
「今さらそういう理解が要るかね」
「今さら要らないという法もないでしょう」と熱してくる。
「君のことはたいてい知ってるつもりだ」
「そんな乱暴な」
「そうでもないさ」
「いろいろ云って、結局誰も読んでくれないのです」と何樫君はまた落ち込む。畳の縁を指でなぞったりして、およそ男らしくない。
「まあ、その話は後にして何か食おうじゃないか」
「先生ひとりで召しあがってください。私は平気です」
どうも扱いにくいし腹は減るしで、だんだん気が立ってきた。
「なんにしても押し付けはいかんじゃないか」
「先生も私に食うことを押し付けないでください」
その後、何樫君は冷えたり熱くなったりしながら、一時間ほども話して帰った。

しかし、私はついに小説を読まされることになった。さっそく原稿を送ってきたからボール箱に入れて部屋の隅に置いてあるが、一、二枚めくっただけでまだ読んでみない。彼の云う小説の極意が、そこにどれだけ盛り込まれているかを確かめる気分も起こらない。そのうち、原稿の入れてあるボール箱を見るのも苦になってきたから、家内に云って上から布を掛けてある。

＜了＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0311q/

小説の極意

2011年1月17日23時40分発行